

〔書評と紹介〕

虎尾達哉著

『律令政治と官人社会』

十川 陽一

本書は、二〇二一年三月に鹿児島大学を定年退職された、虎尾達哉氏の第三論文集である。虎尾氏は弘前高校の卒業生で、父は長く弘前大学で教鞭を執り、弘前大学國史研究会の会長も務められた虎尾俊哉氏であり、本誌ともゆかりの深い古代史研究者である。

早速、本書の構成に従って内容を紹介したい。なお各章の概要と成稿の経緯については、本書「序」も参照されたい。

第一章「天武天皇―功臣たちの戦後―」は、壬申の乱における功臣との関係を軸にした、天武天皇についての概説である。天武朝に整備された贈位や功田・功封などの功臣顕彰がその後も天武の皇統に受け継がれたとして、天武の、死後も功臣を長く厚遇しようとする意志と、自身を新しい王朝の創始者とする意識を看取する。ただし、功臣であるからといって無暗に重用することではなく、大舎人制の導入によって若い世代から子飼いの官僚群を育てようとするなど、天武はカリスマというよりも現実主義的な天皇であったと推測する。

第二章「日本律における科刑の軽減をめぐる」は、日本律において、唐律と比して科刑軽減の特徴がみられる点について、天武四年に唐律を準用した「罪刑法定主義」が始まる中、官僚の未成熟な実態を受け入れ、

寛容な統制方針を取ったためと評価する。

第三章「天武朝における冠位の抑制をめぐる」では、天武朝の冠位昇進の実例を分析し、大舎人制、天武七年十月己酉詔の「考」Ⅱ「選」制、天武十四年の新冠位制といったものは、やがて天武王権を支える中核的な官僚となることを期待された下級官人を主対象とするものであり、上級官人の冠位昇進は抑制されていたとする。

第四章「天武天皇の除病延命祈願をめぐる―死にたくなかった王―」は、天武朝晩年に度々行われた除病延命の祈願などが、それ以前にはみられないものであり、天武の特異な執着を読み取る。そうした在り方は、天武の道教への関心からも看取されるとし、自らの死が政治的混乱をもたらすとの危機感から、天武は「死にたくなかった王」であったと評価する。

第五章「藤原宮子の「大夫人」称号事件について」は、神亀元年の藤原宮子称号事件が、聖武は当初から宮子を「皇太夫人」としようとしていたとする通説的理解に対し、令の規定通りであれば自動的に「皇太夫人」となるはずであり、聖武の意図は史料の記載通り「大夫人」の称号を贈ることにあったと指摘する。その背景として、臣下出身ながら「特別な敬うべき夫人」であることを強調したい聖武や藤原氏の意図が存在したと推測する。その上で、称号事件には藤原氏に対する長屋王の反発があり、長屋王の変の遠因となったとみる。

第六章「律令制下天皇即位時の特別昇叙について」は、聖武即位時を初見とする特別昇叙の在り方について検討。即位時の政治状況が昇叙対象者の構成・規模と密接にかかわるとし、聖武の祖父天武が壬申の乱後

に行つた昇叙に起源すると指摘する。さらに、本来冠位の昇叙は極めて稀な僥倖・恩寵であり、平時の昇進を想定していないと推定する。

第七章「奈良時代の政治過程」は、文武・光仁朝について、各時期の政治情勢を整理する。皇位継承の不安定性を一つの基調とし、政変、藤原氏の動向、疫病や大規模事業による国力の変動、政治機構の成熟といった各種要素にバランスよく目配りして概説する。

第八章「律令官人群の形成」は、七世紀以来の律令官人群形成の過程で、法官・式部省が「礼儀」を掌り、特に下級官人群を中心に、官人たちに対して統一的な規範・基準を体得・遵守させる役割を担ってきたとする。かくして天武朝に律令官人群の形成が推し進められたが、一方では天武朝から官人の遣使辞退が横行するなど、下級官人たちが忠良な臣下としての資質を実質的に有していたかは疑問とする。

第九章「律令官人社会における二つの秩序」補考」は、文字通り、氏の「律令官人社会における二つの秩序」(『律令官人社会の研究』塙書房、二〇〇六年。初出一九八四年)の補考。五位以上官人が天皇によって名を把握され、刑罰も天皇に委ねられる階層であるのに対し、六位以下は員数で把握されるべき階層であると推定する。

第十章「律令官人の朝儀不参をめぐって」は、平安初期の元日朝賀、奈良時代後半の列見、奈良時代前半の考唱といった朝儀における官人たちの不参が七世紀代から一貫して横行したとして、儀式を無条件に「君臣関係確認の場」と理解することに警鐘を鳴らす。

第十一章「弘仁六年給季禄儀における式兵両省相論をめぐって―律令制下官司統制管見―」は、給季禄儀において式部省が兵部省の職務を奪

い、文武混合での列立を強行したことに端を発する相論(『類聚三代格』同年十一月十四日官符)を手がかりに、式部省の位置づけを検討する。この給季禄儀における式部省の職務独占を太政官が容認していること、延暦十一年の新弾例に対する式部省の抵抗、考唱不到の官人を式部省が弁護して太政官に違勅罪適用を撤回させたこと、などから、式部省には強大な権限と太政官からの独立性があったと論じ、日本の八省が太政官の単なる事務部局にすぎないとの通説的理解を批判する。

以上、本書の内容を概観した。天武朝に律令官人制確立の画期を置き、それ以降の律令官人制の実像に関わる諸問題を論じた内容となっている。本書全体を通じて、個々の考察は極めて実証的であり、史料が限られた時代であっても、丁寧な整理による事実関係の析出など、基礎的な作業の重要性には改めて学ぶところが大きい。

さて、第一章から第四章は天武に関わるもので、本書の構成上基幹をなす部分である。一連の研究は、第一章の執筆(初出は、鎌田元一編『古代の人物Ⅰ日出づる国の誕生』清文堂、二〇〇九年所収)が発端とある(「序」)。そのこともあってか、堅実な実証の上に立ちつつも、天武個人の評価と関わらせている点が特徴的である。著者は、天武が覇者として畏敬の対象であったことは事実としつつ、専制君主としての本質をカリスマ性に求めるのは一面的であるとし、現実主義を強調している。徹底的な現実主義を実現できることはカリスマ性に包含され得るようにも思われ、人物評はなかなか難しいと感じるが、ともあれそうした現実主義が律令官人制の根幹にあったというのが本書の主張の一つとなっている。

官人制・官人社会への理解については、六位以下が員数で把握される存在であったとする点が改めて強調されている。五位以上と六位以下の差異について、本書では引用されていないが、五位以上は天皇との人格的關係に・六位以下は官僚制原理にそれぞれ基づいて把握され、官人には刑罰上の特権があるにも関わらず六位以下官人には杖罪以下の決罰を励行する法令が散見するとの所論もある（大隅清陽「儀制令における礼と法―律令法系の構造的特質をめぐって―」（『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館、二〇一一年。初出一九九三年）。

また六位以下官人は、五位以上と異なり、地方も含め広範囲に展開している。位階の秩序は施行しやすいこともあって（坂本太郎『坂本太郎著作集第一巻 古代の日本』吉川弘文館、一九八九年）、律令国家進出後の東北地方などでもスムーズに定着した可能性が考えられる（拙稿「律令官人制と古代の東北」、新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』勉誠出版、二〇一八年）。こうした中、六位以下官人の把握に、員数や官僚的秩序といった機械的な原理が持ち出されるのは、ある意味自然である。なお地方官人について本書ではほとんど論及がないが、本書の関心と絡めれば、天武朝には外位の存在が知られる。また第六章との関連でも、聖武即位時であれば、郡司への勲位一斉授与も行われている。地方への叙位については、たとえば郡司任官時の初叙以外にも、大宝令制では外散位の制が整備され、養老二年四月には無位の主政・主帳の以理解任後の続労が制度化されるなど、定期的な考選・叙位のシステムは地方へも早くに展開する。このように地方と中央とが連動して、官人制が様々な切り口から拡大してゆくことは言うまでもないが、地方へも目

配りした場合、位階の持つ意味や昇叙の在り方など、本書の見通しがどこまで維持できるのかは検証が必要であろう。

官人制関連ではもう一つ、官人がどこまで真面目に勤務したのか、という点が本書の大きな眼目である。ややもすれば官人たちが無条件に真面目に働くと思いがちな我々に対する強い問題提起としても、重要な指摘であろう。なお著者は、本書刊行とほぼ時を同じくして、『古代日本の官僚―天皇に仕えた怠惰な面々―』（中公新書、二〇二一年）を物さしている。本書の内容を一般向けに整理したものであり、併読することで本書の理解も深まるだろう。

さて本書ならびに上記の新書においては、一貫してサボる官人・寛容な政府、というシエーマが打ち出されている。かかる側面があることに異論はないが、異なる時期・儀式を素材にして論じられた第十章の内容などからは、時期ごとの国家的な官僚支配の達成状況と、官人側の意識の状況についてどのように考えるべきか、という素朴な疑問も浮かんた。たとえば同章の註14で、舒明八年の朝参・退朝時間の記事を踏まえ、「わが律令官人の怠業動向は存外古い前史を有しているのではなからうか」とするが、これ以前の十七条憲法で曖昧な出勤時間のみが定められていることからすれば、律令制が定着した時点での「怠業」と、その前段階での「不徹底」とは位相を異にするであろう。八世紀を通じた律令制の展開過程の中でも、少しずつその在り方を異にする可能性はないのだろうか。また本書でも触れられている、節会を懈怠した官人を節禄の対象から除外する措置など、怠慢な官人への処分も定着してゆく。こうした点も踏まえば、一律に単純な図式に落としこむのではなく、制度的な

展開過程を考えながら著者の提言を咀嚼してゆくのが重要だと感じた。

ところで近年では、北宋天聖令の発見と公開などにより、律令制研究は活発である。また天聖令と関わらずとも、律令官人制研究も低調とも言い難い。しかしながら、本書で引用されている先行研究は、平成二十年以降のものはごく僅かである。もちろん、新しいから良いというものでもないが、近年の研究動向と著者の研究がいかに切り結ぶのか、既出論文の再録であっても補注などの形で積極的な発言がないのは、読者として残念であった。

なお蛇足ながら、第二章で「罪刑法定主義」の語が度々用いられている点が気になった。罪刑法定主義という語は、あらかじめ違反行為と罰の内容を周知しておくことによって刑罰権の濫用から国民の権利を守るという、近代法の原則の一つである。律令制における罪と刑罰との関係は、一見この罪刑法定主義と似てはいるが、「非常之断、人主専^レ之」（名例律除名条疏議）や「凡諸司断^レ事、悉依^二律令正文^一」（獄令諸司断事条）のように、官僚が権限を逸脱した判決を下さないための原則である、と理解するのが通常であろう。この語があえて用いられたものか否か図りかねるが、違和感が残った。

以上、本書の概要と、感じたところを雑駁ながらも述べてきた。誤読などがあれば平にご海容を請うばかりである。ともあれ本書により、改めて律令国家史における天武の存在を評価する必要があることが示され、かつ官人や儀式という言葉の意味をアプリアリに捉えるべきではない、といった問題提起がなされたことは重要な意義であろう。本書の成果を踏まえ、官人制研究が一層深化することを願いつつ、小評を終える。

（A5判、三六二頁、塙書房、二〇二一年三月刊行、本体価格一一一〇〇円）

（そがわ・よういち 慶應義塾大学文学部准教授）